

◆◆◆ 公教育は家庭教育に ◆◆◆  
◆◆◆ どこまで関与するか (3) ◆◆◆

## 保育園と家庭とのいい関係は

佐野 洋子

「さあ、いくよ！ 用意はいいかい？」

「いいよーっ。佐野家名物ひっさつ自転車四人のりー」  
近隣の静かな朝の雰囲気は、うちの三人の子供たちと、その親たる私の声でやぶられる。

うちの子供は、五歳の長男、三歳の長女、一歳の次男の三人。その三人の子と保育園の荷物と自分の荷物を、経験からあみだした高度テクニクで自転車に積み、私は、朝の商店街をかけぬける。通りすがりの人の感嘆の声をききながら。

保育園なしには始まらない一日。保育園なしには、始められない仕事。保育園なしには考えられない、五歳と三歳と一歳と三十五歳の人生……。ああ、そうだった、つれあいの四十二歳の人生も……。

私は、放送局で番組制作の仕事をしている。朝の自転車四人乗りのアクションシーンに何故つれあいの姿がないかといえは、彼は、私たちが住んでいるところから車で一時間余りのつくば学園都市で大学の教員をしているからである。つまり単身赴任。

かくして、うちの三人の子供たちは、保育園、ともすれば不規則になりがちな勤務の私、もう五年越し子供のお迎えをお願いしている近所の「おばちゃん」、どうしようもない時はつくばから車をぶっとばして帰ってくる「パパ」の手を渡り歩く毎日である。

「パパ」の顔を毎日見なくても（実際、週のうち一、二日しか見られないのだが）、保育園の保母さんとは毎日顔を合わせる。子供たちだけでなく、親にとっても、保育園は大きな存在なのだ。

この稿の課題を「公教育は家庭教育にどこまで関与できるか」と与えられたとき、しばらく考えた。

そもそも、家庭教育、公教育それぞれのすみ分けの理念などというものはあるものなのか。時代とか社会状況によってそれはいろいろに変化するのではないか。昔は公教育なんて無くてみんな家庭がやってたじゃないか。

それに、ただでさえ「私」に対しての「公」の肥大が言われている現在、守らなければならないほどの「家庭教育」が（『公』と止々堂々と相対できるほどの『私』

が）実在しているのかさえ疑問だと思う。みんな、学校におまかせしているじゃないか。

そんな一般的な教育論は私には荷が重し、現在の状況をかこつだけの結果になるのはわかっている、あまり気が進まない。

だから、私が何かを発言するとすれば、「保育園に三人の子を預けている母親として」、「我が家にとっての『公教育』である保育園について」、「保育園と家庭とのいい関係とは」と課題を読みかえて、発言するしかないのだろうと思う。

現在私は、かなり度胸のすわった母である。でも、多くの親たちは、核家族社会の中で地縁・血縁から孤立し不安な子育ての中にある。

私も育児休職をして長男を育てていた頃の不安な日々を思い出す。核家族にも満たない最小単位の家庭で（つれあいは当時も単身赴任だった）、しかも引越してきただばかり。言葉の話をしない（あたりまえだが）我が子と息をひそめるような暮らしをしていた。

お散歩の時間、食事の時間、まるで刑務官のようにきちんとタイムテーブルをこなしていた。たまに夜寝つきが悪いと「すわ、夜睡眠時にでるといわれる成長ホルモンがでないではないか」と真面目に心配したんだからね。

保育園はそんな不安な親にとって後光がさして見えるくらい強い強い味方である。

友達の中にはいったわが子はいきいきして見えるし、不思議と親のいうことはきかなくとも先生のいうことはきくのである。いちだんと大人びたわが子の姿に、私は「子供は百人の手に抱かれて育て」というおぼあちゃんの言葉を思い出したものだ。

だから、「保育園に連れてまで働きたいなんて」「三歳までは母の手で』っていうじゃないの」などという意見はへとも思わず、いまや「いいところだぞ、保育園」と思う熱血があちゃんなのである。「保育に欠ける（やな言葉だ）」だの「親が働いている」だのとけちなことをいわずに、乳・幼児はみんな保育園に入れるシステム

にすればいいのに、と思う。

そして、保育園の方も現在の子育て環境の危機をひしと感じているから、懸命に親たちの啓蒙に努めている。使命感に燃える、えらい、ありがたい保育園。

しかしある時、子育てに関して、保育園がつねに親を啓蒙する側にあるというこの図式は、果たしてこのままでいいのだろうか、という疑問が私の中に芽生えた。だいいち私くらいのものなのだ、保育園にあれこれ意見をいうのは…。

毎月のお便り、連絡帳、保健だより、保護者懇談…。保育園から発信される子育て情報は、日常生活の細部にわたる。子育てがそもそも日常生活の積み重ねだからそれ自体は無理からぬことだ。

「朝は早く起こしましょう。野菜を食べさせましょう。散歩をさせましょう。お手伝いをさせましょう。よく、噛ませましょう。朝、排便の習慣をつけましょう。甘いものはやめましょう。薄着をさせましょう」などと、その当たり前といえは当たり前のことを言われても、

親は基本的に逆らわない。早寝早起きを心がけ、散歩をし、何か手伝わせることはないかと身の回りを見直し、朝ウンチをしないと、きのう野菜を食べさせなかったせいかしらと思ひ悩む。もしくは悩んでいるふりをする。

「わかってるわよ、そんなこと。それができないから困ってるんじゃないの」なんていう親は見当たらない。

えらい保育園と羊のように素直な親たち…。

でも、なんか、表面的な感じだなあ、とわたしはある時思ったのである。それに、これはもしかして子育てを通して私的生活を管理されてるんじゃないかしらとも思ったりするのである。

「そうかしら、今の親は意外とルーズな子育てをしてるんじゃないの？ 休日のファミリーレストランなんか満員だよ。子供に手作りの食事を、なんていうあんたみたいな（くそ）真面目な親がそれほど多いとも思えない。

そんな風だからあれこれ細かく指図するくらいでちょうどいいんじゃないの。うるさきや無視してればいいのよ」と友人の言葉。

「そうかなあ…。これでは家庭は保育園の下請けになりかねないんじゃない？ ひねくれた見方なのかしら…」  
「ひねくれてるよ」

ここで、つれあいの登場である。

「保育園はそんな悪意に満ちたところじゃないだろう？」

「もちろんそうよ。みんな『いい人』たちよ。でもね、親がつねに啓蒙される側で、保育園がつねに指導する側っていうのがどうもね。『子供を共に育ててゆくというパートナーとしての保育園』という意識が持ちにくいのよね」

例えば、「夜早く寝かせましょう」といったって、家庭の事情で思うにまかせないこともある。その時に親は「仕方がないんです、どうしたらいいでしょう」と堂々と相談できるだろうか。そして保育園の側もその親の思いに応えていろいろな道を共に模索してゆくだけの用意があるだろうか…。私はその先にどんな話が展開するか、そっちの方がずっと楽しみなのに…。

「親はいつもじっと聞き流しているだけよ。『そうは

いったってうちは無理だ』なんて思いながらね。保育園も家庭に対する干渉になるのを恐れてそれ以上つっこむことはしない。本当は、今の子育てをめぐる本質的問題にまで、例えば親の労働環境のことにまで話がいきつくチャンスだったかもしれないのに、いつだって『夜は早く寝かせましょう』『はい、そうですね』『それで終わり』

「保育園と労働環境の話しただってしょうがないだろ」

「あら、そういう感覚が生活の場での連帯を阻むんだわよ」

もういい加減に子育ての建て前ばかりを云々するだけに終始しないで、それぞれの抱えている悩みから現代社会のシステムの問題点に気づいてゆく、ワークショップのような保護者と保育園の関係ができないものだろうか。

けちをつけるといえば、こんなことがあったのも思っ出した。

今年の夏の長女の保育参観。

見守る親たちの前で展開されたのは、二人ずつに組ん

でのトラック走。自分がゴールテープを切るのだと、張り切って走る子供たち。

しかし、わが娘。にこにこ愛想をふりまきながらのーんびり走り、ゴールテープは相手にとっくに切られてしまっただけで、ゴールの手前で止まってしまった。

「ちゃんとゴールまで走るのよ」

先生の一言。

私は思った。「ゴールまで」「全力で」「負けたくないと思っただけ」…なんか肩に力が入っている感じだなあ。だいたい、三歳児に運動会の競技よろしく競争させる意味ははたしてなんぞや。

わが娘はそれはそれは生き生きと楽しそうに走っていて、私はけっこう満足したのだが、この時には、むしろ「速く全力で頑張ってる」という課題にどうにかハマってもらいたいという雰囲気、私は感じたのだ。

「あんまり、そういうの好きじゃないんです。競争より、楽しくわくわくすることを通して全力で走らせる方法はないものかしら…」

懇談の席でそう感想で述べたら、浮いてしまった。しらけてしまった場内。

そこで、またまた、つれあいの登場である。

「それで例によってうるさい親をやってきたわけ？ 『家庭教育が公教育にどこまで関与できるか』っていうテーマの方がよかったんじゃないの？ 今回の原稿も」

「ちゃかさないですよ。でもさ、ちょっとどうかと思ったのよ。『速く、全力で、頑張って…』まるで社会の価値観そのまんまっていう感じなんだから」

「頑張ってることだって、子供の健全な発達には必要なことかもしれないだろ。先生だって保育理論にもとづいてやってるんだよ。細かいことでけちつけてるっていう感じだぜ」

「でも、私はただ黙って感心してみてるのなんていやだな。だって、親なんだから。それに、教育というのは『さあ、これから教育します』なんていう瞬間ばかりじゃないと思うよ。そういう瞬間ばかりなら、『これはどうかと思う』なんて親も言いやすいんだけども。ど

んなことでも親の方に向けて意見の窓を開けておく。親も思うことは伝えてゆく。そういう姿勢が大事だと思うけどね…」

やれやれ…。亭主を相手に演説をぶってしまった。  
「パパ、ママ、ふうふげんかしてるの？」

話している私たちのかたわらで心配そうな長男。



子供にわからない単語を並べて話をしているので不安になったらしい。

ごめんごめん。喧嘩してるわけじゃないのよ。

さて、気を取り直して話を整理すると、子育てをめぐるさまざまな問題状況が言われる中で、保育園だって必死で頑張ってくれている。子供たちの健全な発達めざして。

その「健全な発達」という価値に照らして、保育園から与えられる様々な肯定イメージとマイナスイメージ…。「○○ちゃんはこうだから素晴らしい」「○○ちゃんはこの点が困る…」。それは子供に対してだけでなく親に対して、助言という形で間断なく与えられる。「こんな点に注意しましょう」「健全な発達のためには、今、子供に○○をしてあげてください…」

私は基本的には保育園の取組みに感謝しつつも、一方で、この「子供の健全な発達」という価値がろくに検証をなされないままひとり歩きし、その名のもとに様々な観念がしのびこんでくるのがとてもこわい。

「これも子供の健全な発達を促すためののだ」といわれれば反論のしようがない。さまざまな保育理論はとも科学的にきこえるし…。

私たち親が警戒しなければならぬのはまさにその点なのではないだろうか。だってその科学性を論拠として、それこそ体罰だってオッケーよ、ということになりかねないじゃないの。

ただし、私のいいたいのは、親は保育園を常に疑問の目で監視せよということではない。

何かに似ている。この状況は何か似ている気がするのだが…。

そうだ！ 病院！

「健康」というのは誰も疑うことのできない、絶対の価値である。

みんな健康でいたいから、自分の身体に何か病気がひそんではいないかいつも不安だ。本当は寝ていれば治る風邪でも病院にすつとんでゆく。

自分の身体のことに関する情報を一番持っているのは

自分自身のはずなのに、専門家であるお医者さんのいうことが一番と、今日も薬を飲み下す。

でも治らない。というより治った気がしない。結果、「私は健康なのだ」という実感を持ってない。いつも不安なのだ。

高度化・専門化することによる情報の偏在。専門家へのおすがり。その結果としての恒常的不安。そして生きていく上での主体性の喪失…。

うわー、なにやらえらいことだ。でも冗談ではなく、この状況を押し進めれば、子育てはそうしたいまの医療の現状に近づいてゆくのでは、という予感がする。

医療における価値が「健康だ」とすれば、子育てにおける価値は「健全な発達」だ。昔、たいていの病氣は医者にかからずとも家庭での養生だけで治していたのと同じように、子供も家庭とそれを取り囲む地域共同体の中で放っておかれながらそれなりに「健全な発達」を遂げていたのだ。

ところが、研究され、理論化され、専門化したとき、

子育ては私たちの手を離れてしまった。科学的保育観の名のもとに。「ニュートンが万有引力の存在を発見する前からりんごは落ちていた」にもかかわらず、私たちに、昔はりんごが落ちるのと同じくらい当たり前にできていた子育てがわからなくなってしまったのである。

わからない親は、「保育園にまかせておけば」とお任せし、羊のように従順になる。保育園は、一生懸命啓蒙に努めるが、芳しい反応は得られない。

対立も対話もない時の流れ…。対立だって、時には対話への契機となるかもしれないのに。

この稿の課題「公教育は家庭教育にどこまで関与できるのか」。どこまで関与できるのかといったって、ここまでだよという線引きはないのだろう。「子供の教育をめぐって、公と家庭が縄張り争いをする」という図式ではもう事の本質はとらえられないと思うのだ。

結局、結論めいたことをいうとすれば、今や自信喪失気味の親や家庭の復権が、教育の場では必要なのだろう。言葉を変えれば、それは公教育に対峙できるだけの



「親の主体性」ともいえるだろう。そして、教育を家庭の「義務」というよりむしろ「権利」であると捉えかえた時、その自信は生まれるのではないか。

「ともかく、親が自信を回復することよ。子供のことをわかるのは私なんだってという自信を持つことよ。そして、『公』の側にどんどん思うことを伝えてゆく。『私』を守るんだってという意識をもつことよね。互いにどうすみ分けるかは、それからの問題だと思ふのよ」

「言うのは簡単だけだね。道は遠いっていう気がするよ」

もちろん私だって、自信に満ちた親ではない。

ああやった方がよかったか、こう叱ったほうがよかったか。『子育ては悔いと迷いの連続だ』というのが実感である。

だが、おちおちそんな愚痴さえこぼしていられないほどの、この子供たちをめぐる暗澹とした状況は何だろう。

今は保育園だからまだいいのだ。

だが、子供がいずれ進学するかもしれない近くの公立中学では、父母が授業の監視をしているという。「あの小学校ではいじめで大変だってよ」「私立にあげたけれどお金がねえ」「せめて越境させた方がいいかしら」

長男が学齢期を迎えた今はそんな話ばかりが聞こえてくる。

「これから、小学校、中学校、と進んでいったときに、親の力が試される時よ。つよい親になってやろうと。いじめ・体罰・校則・管理よ、待ってなさいよ！」

ひとり気炎を吐く私。

一方つれあいはといえば、

「やれやれ、先生も大変だけど、おまえもいろいろたいへんだな。『おまえのかあちゃんおつかねーな』、なんていじめられるかもなあ。まあ、何でも成長の糧といえば糧だから、めげずに育ってゆくんだけぞ」

と、しきりに長男を慰めているのであった。

(NHK・ディレクター)